

類義漢語「貧乏」と「貧困」の品詞と意味

—コーパス調査にもとづいて—¹

中山 健一

要 旨

意味が似通っていて、ともに名詞としても第二形容詞（形容動詞）としても使われる漢語「貧乏」と「貧困」の使用頻度における品詞の偏りと意味について、国立国語研究所「現代日本語書き言葉均衡コーパス（BCCWJ）」を用いて調査した。現代書き言葉日本語において、基本義では、実例数の点から言うと「貧乏」は第二形容詞、「貧困」は名詞に大きく偏る。語彙的な意味の違いとして「貧乏」は一人一人の人間が個別に持つ状態を表すのに対し、「貧困」は個人の状態というより、人間の集団の状態を表す。このことから、「貧困」は「貧乏」と違い社会に存在する現象といった抽象概念を表すため「貧困」のほうが名詞として使われる傾向にあると言える。また、「貧困」の派生義について、派生義は第二形容詞の場合に特にみられることが分かった。「貧困」は、基本義においては第二形容詞の場合「貧乏」と重なるので、ある種の棲み分けとして「貧困」が第二形容詞の場合に特に派生義を発達させていると考えられる。

1. 問題の所在

本稿でとりあげる「貧乏」と「貧困」は類義関係にある。一般に和語よりも漢語のほうが、類義語が多く意味・用法の点で語彙体系のなかで細かく細分化されるため、この種の類義漢語は枚挙にいとまがない。一例として、外国人に対する日本語教育での中級漢字教材『Intermediate Kanji Book Vol.1』の「第4課 漢語の形容詞」には「同じ漢字を使った、意味が似ている語」として「貧乏」「貧困」をはじめ、次のような類義漢語があがっている。

「簡単」と「単純」／「適当」と「適切」／「急速」と「急激」／「健康」と「健全」
／「貧乏」と「貧困」／「幸福」と「幸運」／「不幸」と「不運」／「重要」と「重大」
／「正確」と「明確」／「明解（明快）」と「明白」／「平等」と「均等」（pp. 67-68）

これらの類義漢語の使い分けは中級以上の日本語学習者にとって非常にわかりにくく、適切な単語を適切な文脈で使いこなすことは容易でない。したがって、日本語教師は意味の違いを正確に理解したうえで、適切な文脈を示しつつ指導する必要がある²。

これらの類義漢語の使い分けは多くの場合、意味の違いと、それに関連しての共起する名詞（主語となる名詞や連体修飾語となる名詞など）の違いなどの問題、つまりコロケーションの問題とされる。たとえば、上記の「健康」と「健全」について、「健康」は「健

康なからだ／肉体／人」などのように使われるが「健全」は「健全な精神／考え方／財政」などのように使われる。「重要」と「重大」について、「重要」は「重要な仕事／研究／機能」などのように使われるが「重大」は「重大な問題／ミス／責任」などのように使われる。

本稿では、それに加えて「品詞」に関わるふるまいの違いについて考察する。このことはこれまでほとんど指摘されていない点で、日本語教育の点からも重要であると考えられる。

一般に、「日本語の漢語には、複数の品詞を兼務する例が多い」（村木2004：26）。本稿では、品詞の兼務がみられる漢語のうち、類義語の関係にあつて語彙的な意味が非常に似ており、一般にどちらも名詞としても第二形容詞（形容動詞）³としても使われるとされる「貧乏」と「貧困」をとりあげる。

実際、「貧乏」も「貧困」も、次にあげる例のように、名詞としても第二形容詞としても使われる。

- (1) 【貧乏：名】多くの方々のご支援で運良く私は独立し、お店もどんどん増えました。貧乏から解放され、お金や、立派な家や、社会的地位や、地域での名声がいつのまにか得られていたのです。（「無知は人生に壁をつくる」）
- (2) 【貧乏：形】アルセーヌ・ルパンもまだ貧乏な青年だった。失業者だった。仕事をさがしてパリの街をうろついていた。（「ルパンの大失敗」）
- (3) 【貧困：名】私は本プロジェクトに参加することによって、カンボジアの貧困からの救済と教育環境の整備に協力できるだけでなく、私たちの国の問題についても考えるよい機会をもつことができました。（「小泉首相が目にした「米百俵」の精神」）
- (4) 【貧困：形】また「どの子どもにも英語の習得を」と願い、貧困な家庭層の子どもを対象に、キリスト教団体（ワールド・ビジョン）と出版社が中心になり、各地でボランティアの英語活動も行われています。（「日本の学校英語教育はどこへ行くの？」）

本稿では、コーパスの分析にもとづき、次の点を考察する。

- 〈1〉 実例数の偏りの点から「貧乏」と「貧困」とに品詞に関わる違いがあるか。
- 〈2〉 「〈1〉」の違いがあるとすれば、それと語彙的な意味がどう関わっているか。

まず、次の2節で先行研究として国語辞典の記述をまとめ、問題の所在を明らかにする。3節で日本語における「品詞」、および「ある単語が複数の品詞にまたがること」について、本稿が依拠する考え方をまとめ、本稿の立場と実例分析にあつての品詞分類の方法について述べる。それを踏まえて、4節で現代語書き言葉コーパスを用いて「貧乏」と「貧困」の実例を分析する。

2. 先行研究

「貧乏」と「貧困」の品詞について、前掲の村木（2004）において「貧乏」を名詞・動詞・（第二）形容詞の兼務の例として挙げている（ただし、「貧困」については具体的な記述はない）。それ以外に、管見の限り、「貧乏」と「貧困」の品詞について取りあげた論考は見当たらない。以下、先行研究として、国語辞典での「貧乏」と「貧困」の品詞表記と語釈をまとめる。品詞表記については辞書間で大きな差がなかった。「貧乏」「貧困」の品詞表記はともに「名詞」と「形容動詞」があるとしている。また、「貧乏」に「動詞」の用法があるとしている辞典もある。意味についても辞書間で大きな差はない。「貧乏」は1つの意味（基本義）のみで、「貧困」は基本義と派生義1つの、2つの意味を立てている。

代表例として大型辞典の『日本国語大辞典』、中型辞典の『大辞林』、小型辞典の『明鏡国語辞典』の品詞表記と語釈を挙げる。

・『日本国語大辞典』

「貧乏」〔名〕（形動）

財産や収入が少なく生活が苦しいこと。まずい生活をする事。また、そのさま。貧窮。貧困。ひんぼく。

「貧困」〔名〕（形動）

- (1) 貧乏で生活に困っていること。また、そのさま。困窮。貧窮。
- (2) 欠けて不足していること。乏しいこと。また、そのさま。

・『大辞林』

「貧乏」〔名・形動〕 スル

財産や収入が少なく、生活が苦しい・こと（さま）。

「貧困」〔名・形動〕

- (1) まずしくて生活に困っている・こと（さま）。
- (2) 必要なもの、大事なものがとぼしいこと。また、そのさま。

・『明鏡国語辞典』

「貧乏」名・形動・自サ変

収入や財産がとぼしくて、生活が苦しいこと。

「貧困」名・形動

- (1) 貧しくて生活に困っていること。
- (2) 必要なものが乏しいこと。大事なものが欠けていること。

3. 「品詞」, 「ある単語が複数の品詞にまたがること」

3.1 「品詞」とは何か

まず、本稿での「品詞」の基本的な捉え方について、以下にまとめる⁴。

「品詞」は、『日本語学研究事典』では次のように定義されている（下線は中山）。

「それぞれの語を文法（意味・職能・形態）の面でグループ分けした時のその1つ1つ」

村木（1996）においても、「品詞」を「文法上の共通の特徴をもった単語のグループ」（p. 20）とし「一般に品詞分類の基準としてとりあげられる主なものは、意味・形態・機能の三つである」（p. 21）としている。ここでいう「機能（職能）」とは、文における統語的な機能のことである。前掲の村木（2004）では、村木（1996）での「形態」「機能」を「形態論的な特徴」「統語論的な特徴」と言い換えている。

「意味」「形態」「機能」の点から、主要な品詞についてまとめれば、大略次のようになる（高橋1996 ほか）。

表1：日本語における主要な品詞

品詞	意味	形態 (形態論的な特徴)	機能 (統語論的な特徴)
名詞	物・人が典型だが多岐にわたる	いわゆる格助詞がつく (広義での曲用)	主語や補語になる
動詞	動作（動き）・変化	語形変化をする（活用）	述語になる
形容詞 ⁵	性質・状態	語形変化をする（活用）	連体修飾語や述語になる
副詞	様子・程度 ⁶	語形変化をしない	連用修飾語になる

意味、形態、統語的な機能のうち「単語を品詞にわかつ基準は、統語的な機能が最重要」であり、そして、統語的な機能は意味、形態と深く関わっている（村木1996:29-30）。ある品詞の単語が、そのような統語的な機能を担う単語だからこそ、それに対応する形態論的な特徴や意味を持つことになる。しかし、形態論的な特徴と意味は、絶対的な品詞の分類基準にはならない。

具体的には、副詞は語形変化をせず、形態論的な特徴に乏しい。したがって、形態論的な特徴は、すべての単語に備わっているわけでない。

意味に関して、村木（1996）が指摘するように、たとえば、「遊ぶ」と「遊び」はどちらも語彙的な意味として「動き」を表すが、その形態論的・統語論的な特徴から前者は「動詞」、後者は「名詞」とされる。村木（1996）は、語彙的な意味が「品詞の一次的な分類基準にはならない」としたうえで、それでも、「それぞれの品詞が、典型的、中心的にどのような意味と対応しているかを問題にして、名詞がものを、動詞が動作運動を、形容詞が状態性質をあらわしているということは決してまちがいでない」とする。その上で、名詞は、「現実の一断片を発話の「対象（素材）」とする必要」から、もの以外にも、さまざまな概念を表す単語を含むとする（p. 23）。

3.2 ある単語が複数の品詞にまたがること

1節で述べたように、日本語の中での漢語には「品詞の兼務」が多く見られる。

むろん和語でも、転成という形で、同じ共通の語幹を持つ複数の品詞の単語が存在する。

たとえば、動詞のいわゆる連用形から名詞がつくられ（「川が流れる」－「川の流れがはやい」）、形容詞の語幹に接辞「～さ」をつけることで派生名詞がつくられる（「山が高い」－「山の高さをはかる」）。しかし漢語の場合、転成という形ではなく、同じ共通の語幹が複数の形態論的・統語論的特徴をもち、複数の品詞にまたがることもある。たとえば「困難な問題」「困難をきわめる」のように「困難」は、接辞「～さ」をつけるという派生の手続きがなくても、そのまま第二形容詞としても名詞としても使われる。

同時に、村木（2004）は、特に、名詞・（第二）形容詞、副詞などでは「語形だけでは、品詞の区別がまぎらわしい場合」があり「ある品詞と別の品詞とは、つねに完全に排他的とはいえない」（p. 2）と指摘する。

「品詞の兼務」の具体例を村木（2004）から挙げると、次のようになる。

- ・名詞と動詞：愛，参加，研究 など
- ・名詞と形容詞：幸福，自由，皮肉 など
- ・名詞と動詞と形容詞：心配，無理，満足 など

すべての漢語で品詞の兼務がみられるわけではなく、むしろ、「先生」（人）「新聞」（物）「未来」（抽象概念）などは名詞のみである。「簡単」「快適」「重大」などは形容詞のみである。名詞にする場合には、和語の形容詞同様「簡単さ」「快適さ」「重大さ」と「～さ」という派生名詞にする必要がある。

ただし、名詞と形容詞の兼務と言える漢語でも「～さ」が絶対につかないわけではない（「貧困」「貧乏」もそうである。4節の最後で検討する）。逆に、通常形容詞としてしか使われない漢語も、「～さ」をつけずにそのまま名詞として臨時的に使われることがないわけではない。「兼務」と言えるかどうかは截然と分けられない部分があり連続的である。そして、本稿で詳しく述べるとおり、「兼務」であっても、その使用頻度に差がある。

3.3 本稿での品詞分類の方法

以上で述べたような、品詞分類をめぐる問題は、本稿での考察にも直接関わる。

まず意味について、「貧乏」「貧困」ともに語彙的な意味としては状態・性質を表す。状態・性質を表すのは典型的には形容詞だが、前述のとおり名詞も状態・性質を表しうる。また、「貧乏」はまれに「貧乏する」の形で動詞としても使われることがあり、その場合は「貧乏な生活をおくる」という意味で用いられ「動作」を表していると言える。

次に形態について、形態論的な特徴は個々の実例を品詞によって分類する際に大きな手がかりになる。

名詞と第二形容詞、動詞は、形態論的に特徴に違いが見られる。具体的には次のとおりである。

- | |
|--|
| <ul style="list-style-type: none">・名詞：格助詞（ガ，ヲなど）をともない文の中で主語や補語としてはたらく。
格助詞ノをともない名詞を修飾する。・第二形容詞：格助詞をともなわない。主語や補語にならない。 |
|--|

「～ナ」という語形で連体修飾する。
「～ニ」という語形で連用修飾する。
・動詞：「スル」と組み合わせる。

しかしながら、形態論的な特徴だけでは、品詞の区別がつかない場合もある。

・名詞・第二形容詞：「～ダ」の形で文の述語になる。

鈴木（1972）では「名詞と第二形容詞にまたがる単語」として「健康，自由，親切，貧乏，乱暴，元気，けち，らく，いんちき，失礼」を挙げ，それが述語として使われたとき「形だけからは，はっきり区別がつかない」とする。その上で，「かれは健康だ」の「健康だ」は「第二形容詞」であり，「とても」「ひじょうに」など程度副詞が入りうることもそのあらわれだとしている。それに対し「たいせつなのは健康だ」の「健康だ」は名詞であり，この場合「たいせつなのは母親の健康だ」のように「連体的な形式でかざるができる」とする。

これは，佐久間（1941）のいう「品さだめ文」の2種類「性状を規定するもの」（〔何々〕は〔どんなか〕だ，形容詞述語文が典型）と「判断を表現するもの」（〔何々〕は〔何か〕だ，名詞述語文）との違いである。この場合，形の上ではどちらも「～だ」であり，形だけでは品詞が特定できない。統語的な，主語と述語との関係から品詞を特定する必要がある。それが性状規定の文なのか，つまり，述語が，主語に立つ名詞が表す物事がもつ性質や状態を表している文なのか，あるいは，判断の文なのか，つまり，主語に立つ名詞が表す物事と述語に立つ名詞が表す物事との論理的な関係を判断し述べる文なのか，という点に基づかなければ，品詞を分けることができない⁷。

具体例を示すと，例5は第二形容詞，例6は名詞の例として分類される。

- (5) 【貧困：形】その国は貧困だ。
(6) 【貧困：名】その国がかかえる問題は貧困だ。

以上のように，実例を品詞に分類する際には形態論的な特徴，統語論的な特徴の双方を基準に行う。「～だ」の形で述語になる場合には，統語論的な特徴を基準に行う。

以上を踏まえ，次節から実例分析に入る。

4. 実例分析

4.1 実例収集の方法

まず，実例分析の対象について述べる。「貧困」がかたい書き言葉の文章に限られるという文体的な制約があることから，書き言葉を実例分析の対象とする。

実例収集には，国立国語研究所の「現代日本語書き言葉均衡コーパス（BCCWJ）」を使用した。BCCWJには，書籍（「出版」「図書館」「ベストセラー」の3種），雑誌，新聞，白書，教科書，広報紙，質問サイト，ブログ，韻文，法律，国会会議録と，さまざまな言

語資料が含まれるが、本稿ではBCCWJのなかの「出版・書籍」データを用いここからの実例を収集した。ただし、「出版・書籍」だけでは十分な実例が収集できず結論が出せない場合には、「出版・雑誌」「図書館・書籍」にも範囲を広げて実例を収集し分析を行った。なお、検索にはオンライン版の「中納言」を使用した。

なおBCCWJには、それぞれの単語に品詞情報も付加されている。しかし、「貧乏」「貧困」は、すべて一律に「名詞」として扱われているため、コーパスの品詞情報は、本稿での調査に使わなかった。

4.2 品詞ごとの実例数の偏り

まず、BCCWJ「出版・書籍」データの実例分析結果を表2に示す。

表2：BCCWJ（「出版・書籍」）の分析結果

	第二 形容詞	名 詞	サ変動詞	複合名詞 派生名詞 の一部	派生形容詞 複合形容詞 の一部	分類不能	合 計
貧乏	85	46	7	141	4 * ¹	1 * ²	284
	30%	16%	2%	50%	1%	0%	100% * ³
貧困	18	209	0	91	0	0	318
	6%	66%	0%	29%	0%	0%	100%

※注1：「貧乏くさい」「貧乏たらしい」。

※注2：語幹のみで提示された、辞書的な説明の対象となる例。

※注3：各項目の割合は四捨五入しているため、足した結果が100にならないことがある（この点、以下同様）。

表2に示したとおり「貧乏」と「貧困」とでは、品詞の面で実例数の点に大きな差がある。つまり、「貧乏」は第二形容詞に、「貧困」は名詞に偏っている。また、サ変動詞は「貧乏」にしか見られない。

なお、直接品詞の問題でないが、複合名詞・派生名詞の一部となる場合においても、「貧乏」は「貧乏人」「貧乏暮らし」「貧乏学生」のような後要素で表される人・事柄の状態を表すものがほとんどである（以下の例での₁）。「貧困」は「貧困層」「貧困者」「貧困患者」のような後要素で表される人・事柄の状態を表すものも多いが（以下の例での₂）、同時に、「貧困問題」のように後要素の内容となる事柄を表す、「貧困撲滅」「貧困削減」のように動作性名詞である後要素の対象になる事柄を表すなど、名詞らしい例もかなり見られる（以下の例での□）。

<複合名詞・派生名詞> ※実例数2例以上

貧乏：「貧乏人」56例、「貧乏ゆすり」11例、「貧乏くじ」7例、「貧乏暮らし」6例、「貧乏学生」5例、「貧乏生活」3例、「貧乏貴族」3例、「貧乏長屋」3例、「貧乏父さん」3例、「貧乏労働者」2例／「豊作貧乏」2例

貧困：「貧困層」23例、「貧困者」15例、「貧困化」10例、「貧困患者」7例、「貧困問題」7例、「貧困家庭」5例、「貧困地区」3例、「貧困対策」3例、「貧困削減」2例、「貧困撲滅」2例、「貧困国」2例⁸

4.3 品詞と語彙的な意味の関係

4.3.1 基本義

次に、このような品詞による実例数の偏りとそれぞれの語彙的な意味との関係について考察する。

結論から述べると「貧乏」はその状態の持ち主は個人であることが多いのに対し、「貧困」は状態の持ち主は個人というより、人の集団（階層、国、地域）であることが多い。

「貧乏」では第二形容詞の85例中、主語となる名詞や被修飾名詞といった状態の持ち主が個人である例（例7～9）は69例であるのに対し、「階層、国、地域」などの人の集団である例（例10・11）は10例にとどまった⁹。

- (7) 【貧乏：形】 アルサーヌ・ルパンもまだ貧乏な青年だった。失業者だった。仕事をさがしてパリの街をうろついていた。（「ルパンの大失敗」, 例2再掲）
- (8) 【貧乏：形】 しかも彼がいなくなってから気づいたのですが、妊娠していたのです。貧乏なアルバイト留学生が子供なんて産めるはずがありません。（「シルクロードがむしやら紀行」）
- (9) 【貧乏：形】 まあ、明日の米に困るような状況ではありませんでしたが、母は「うちは貧乏だから」と口癖のように言っていました。（「らくご小僧」）
- (10) 【貧乏：形】 それは、農村共同体の外に向けた外的貨幣だったのだ。農村が貧乏だったからだって？ こんな考え方に対しては、ただひと言、はっきり言うておこう。ウソだ。（「パンツをはいたサル」）
- (11) 【貧乏：形】 佐吉は言った。「日本はまだ貧乏な国だ。労働者も資本家もあったものじゃない。みんな心を合わせて働かなければ、外国には勝てんぞ」と。（「トヨタ成長のカギ」）

名詞の場合「[状態の持ち主]の貧乏」という例が存在せず、必ずしも文の構成要素として現れないため、その文脈で何について語られているかによる判断になるが、例12・13のように個人のことを話題にしている例がほとんどである。

- (12) 【貧乏：名】 家売り、残っていた田畑もすっかりなくなると、一転して貧乏が

- 一家の上ののしかかった。留男が五歳のとき、父は憤死した。(「葬った首」)
- (13) 【貧乏：名】多くの方々のご支援で運良く私は独立し、お店もどんどん増えました。貧乏から解放され、お金や、立派な家や、社会的地位や、地域での名声がいつのまにか得られていたのです。(「無知は人生に壁をつくる」, 例1再掲)

複合名詞・派生名詞について、「貧乏」では後述の「貧困」の場合に多く見られる「～層」「～地区」「～国」のような人の集団を表すものが後要素になる例が見られない。

一方「貧困」について、第二形容詞18例中、2例で状態の持ち主が個人(例14)、5例で状態の持ち主が人の集団であった(例15・16)。なお、1例が「生活」、10例が後述する派生義であった。

- (14) 【貧困：形】それは、資本のグローバリゼーションこそ私たちをとことん貧困にし、かつ非人間的な存在にするものだからです。(「マルクスだったらこう考える」)
- (15) 【貧困：形】[表のタイトル] 表十一-1 最も裕福な諸国と最も貧困な諸国との間の消費水準格差(出所) 二千一年UNFPAウェブサイト(「グローバル化とドイツ経済・社会システムの新展開」)
- (16) 【貧困：形】また「どの子どもにも英語の習得を」と願い、貧困な家庭層の子どもを対象に、キリスト教団体(ワールド・ビジョン)と出版社が中心になり、各地でボランティアの英語活動も行われています。(「日本の学校英語教育はどこへ行くの?」, 例4再掲)

名詞の場合、「貧乏」とは対照的にある特定の個人に特有の問題というより、国や地域、ある階層の問題として語る場合がほとんどである。

- (17) 【貧困：名】私は本プロジェクトに参加することによって、カンボジアの貧困からの救済と教育環境の整備に協力できるだけでなく、私たちの国の問題についても考えるよい機会をもつことができました。(「小泉首相が目指した「米百俵」の精神」, 例3再掲)
- (18) 【貧困：名】現代文明社会においても世界人口の多くが貧困、飢餓、疾病に直面しており、適切な保健サービスの恩恵を受けていない。(「最新衛生薬学」)

複合名詞・派生名詞については、個人の状態を表すものもあるが、同時に「貧困層」「貧困地区」「貧困国」ように人の集団の状態を表すものも多い。

以上から「貧乏」は一人一人の人間が個別に持つ状態を表しやすく、「貧困」はいわば現象としての人間の地理的社会的集団の状態を表しやすい。そのため「貧乏」と異なり「貧困」は、人のもつ状態を表すと同時に、人間社会に存在する現象といった抽象概念を表すとも言える。そのことから「貧困」は名詞としての用法が多いと考えられる。

「貧乏」は少数ながら動詞として使われる例が存在する。通常、「～する」と結びつき複合動詞をつくるのは、動作性名詞である（「掃除」＋「する」＝「掃除する」, 「引っ越し」＋「する」＝「引っ越しする」など）。しかし、「～する」は造語力が高く、必ずしも動作性名詞でなくても、名詞あるいは他の品詞の単語と組み合わせさせて複合動詞をつくることができる。たとえば「喫茶店などでお茶やコーヒーなどを飲む」という意味の「お茶する」, 「電子レンジで温める」という意味の「チンする」などである。「貧乏する」の「貧乏」は動作性名詞でないが、「～する」と組み合わせることで「個人が経済的に困窮した生活を送る」という意味を表している。

- (19) 【貧乏：動】「着るものに不自由するほど貧乏してると思ったのかな？」なにしろ、テレビ局の下請け番組制作会社に勤めている相手だ。（「はじめてのおいしゃさん」）

前述のとおり、「貧困」は人の集団の状態を表すので、「個人が経済的に困窮した生活を送る」という意味になりにくい。それに対し「貧乏」は個人の状態を表すため、「個人が経済的に困窮した生活を送る」という意味を表すことができる。この違いが、「貧困する」が言えず「貧乏する」が言える理由だと考えられる。

4.3.2 派生義

以上では基本義（および、基本義に近い「貧乏する」）について考察したが、ここからは派生義について述べる。

「貧乏」「貧困」ともに基本義は経済的な欠乏・困窮状態をさすが、「貧困」には「必要なもの、大事なものがとぼしいこと」（『大辞林』）という派生義がある。

派生義の場合にも品詞に大きな偏りがある。「表2」と同じデータの分析では派生義の例は多くが第二形容詞であり、派生義の全14例中10例を占めた（その他、名詞に2例、派生名詞の一部「～さ」「～化」各1例）。

しかし、「表2」のBCCWJ「出版・書籍」データのみでは派生義「貧困」の実例数が少ないため、この点について分析対象を「出版・書籍」に加えて「出版・雑誌」「図書館・書籍」にも広げて実例を調査した。

全755例中、派生義は38例であり、品詞では第二形容詞が多く21例であった。欠如しているものとしては精神活動に関する事柄、なんらかの能力が多い。（「感性」「発想」「思想」「想像力」「語彙」「知識」「スキル」など）

- (20) 【貧困：形】仮に発言の機会があったとしても、私の思想は貧困だった。（「萌しつはる随想」）
- (21) 【貧困：形】そういうのはソーシャル・スキルが貧困なのである。（「生活にいかすカウンセリング心理学」）

表3：BCCWJ（「出版・書籍」＋「出版・雑誌」＋「図書館・書籍」）の分析結果
「貧困」の派生義の例（品詞別）

	第二 形容詞	名 詞	複合名詞 派生名詞 の一部	(派生名詞の うち「～さ」)	(派生名詞の うち「～化」)	合 計
基本義	32	451	234	(3)	(14)	717
	60%	99%	95%	(33%)	(70%)	95%
派生義	21	5	12	(6)	(6)	38
	40%	1%	5%	(67%)	(30%)	5%
合計	53	456	246	(9)	(20)	755

- (22) 【貧困：形】信頼性、妥当性といった調査研究方法上の制約に縛られることは、研究対象者に対する研究者側の想像力を貧困にさせるのではないだろうか。（「老いと障害の質的社会学」）

名詞の例もごく少数見られる。しかし、第二形容詞のときにみられた精神活動や能力の実例はなかった。いずれも基本義の比喩的な臨時的な用法の域をはず派生義して認められるか微妙な例である。

- (23) 【貧困：名】この数年来子ども相談で、家庭から放棄された精神的な貧困をかかえる思春期の子どもと面接するたびに、その背後にいる、いや、いた筈の父親を抜きに、根本的な問題が解決しにくいことを感じさせられてきました。（「父親になるということ」）

以上のことから、「貧困」の派生義は名詞ではなく、第二形容詞の場合に特にみられると言える。

本節の最後に補足として、「～さ」がついた派生名詞「貧乏さ」「貧困さ」についてまとめる。

「貧困さ」は表3のとおり9例だが、そのうち派生義が6例ある。表3では「派生名詞」に入れたが、第二形容詞から名詞への転成であるため、もともとは第二形容詞である。したがって、本稿の考察のかぎりでは第二形容詞相当と考えてよい。

- (24) 【貧困：「～さ」】「素敵なお酒」理香が嘆声を上げた。言葉の貧困さを、目を丸くした表情で補っていた。（「天の酒殺人事件」）

なお「貧乏さ」は、表2にまとめた実例の中には1例も見られなかった。表3でまとめ

た「貧困」の実例と同じ範囲（「出版・書籍」＋「出版・雑誌」＋「図書館・書籍」，全883例）に広げても，1例しか見つからなかった。

(25) 【貧乏：「～さ」】「当時のこの一党，クソなら喰えたらうが，事実シャンパンの泡でさえ拝めぬ貧乏さだった。（「洋酒天国」）

「貧乏」にせよ「貧困」にせよ，そのままの形で名詞として使われるため，わざわざ「～さ」という接辞をつけて派生名詞にしなくてもよい。そのため，「貧乏さ」「貧困さ」の例は極めて少ない。

5. 結論と今後の課題

本稿では，次のことを明らかにした。

〈1〉「貧乏」と「貧困」は，品詞の面で実例数に差がある。

意味が非常に似ている漢語「貧乏」と「貧困」はともに名詞にも第二形容詞にもなるが，実例数の点から言うと「貧乏」は第二形容詞，「貧困」は名詞に偏る。

〈2〉「貧乏」と「貧困」の品詞の違いと語彙的な意味は関係している。

語彙的な意味について，「貧乏」は一人一人の人間が個別に持つ状態を表し，「貧困」はいわば現象としての人間の地理的社会的集団の状態を表すことが多い。「貧困」はある人の状態のみならず社会的な現象としての抽象概念を表すと言え，そのため「貧困」のほうが名詞として使われる傾向にある。

「貧困」について，第二形容詞の場合には派生義として使われることがある。経済的な欠乏・困窮状態という基本義で，かつ，第二形容詞の場合には「貧乏」と重なるので，ある種の棲み分けとして「貧困」が第二形容詞の場合に特に派生義を発達させていると考えられる。

一般に和語よりも漢語のほうが類義語が多く意味・用法の点で語彙体系のなかで細かく細分化される。特に，本稿でとりあげた品詞に関しては，和語に比べて非常に複雑なふるまいを見せる。その違い，使い分けの実態を明らかにすることが必要となる。本稿では「貧乏」と「貧困」という2単語のみの調査にとどまったが，基本語彙に限っても名詞と第二形容詞（および動詞）の兼務が見られる漢語は比較的多く見られる。実態を明らかにすることが，現代日本語の記述という点のみならず，日本語教育の点からも重要である。

註

- 1 本稿は，第16回日本語文法学会（2015年11月15日，学習院女子大学）での口頭発表の内容の一部に，大幅な加筆修正を加えたものである。学会口頭発表の場で貴重なコメントを下された方々，並びに，本稿投稿に際し貴重なコメントを下された査読者の方々に感謝申し上げる。
- 2 なお，このような使い分けの難しさは中国語母語話者の学習者にとっても言える。それは，漢語であっても現代中国語に同じ漢字の単語があるとは限らないこと，あったとしても意味・用法の点で日本語とは異なることが理由である。
- 3 一般的に「形容動詞」という品詞名が浸透しているが，本稿では論の多くを鈴木重幸氏や村木新

次郎氏の論考に依拠すること、そして、「形容動詞」という品詞名が必ずしも現代語の実態に即しているとは言いがたいことから、以下鈴木氏や村木氏の論考での品詞名「第二形容詞」を用いることとする。これらの論考では、いわゆる「形容詞」を「第一形容詞」、「形容動詞」を「第二形容詞」と呼ぶ。

- 4 本節で述べる品詞の捉え方は、複数の研究者に言われていることであるが、一方で、言語学において品詞の捉え方には諸説あり、この捉え方が完全に定説となっているとは言いがたい。本稿では主に、鈴木重幸氏の論考（鈴木1978, 1980）、高橋太郎氏の論考（高橋1996）、村木新次郎氏の諸論考（村木1996, 1998, 2004, 2009）、そして、概説書としては早津ほか（2012）を参照しまとめた。
- 5 この3節での「形容詞」は、いわゆる形容詞（第一形容詞）のみならず、形容動詞（第二形容詞）を含む。
- 6 陳述副詞を除く。
- 7 名詞述語文と形容詞述語文の違いについては新屋（2009）も参照。
- 8 このほか、「貧困さ」が1例。これについては後述（4節の最後）。
- 9 「個人」としたものには、例9のような「～の家」も含む。その他、「生活」1例、主語が「商人」などで「商人個人」を指すのか「商人層」を指すのかはっきりしない例4例、特殊な意味の例が1例。

参考文献

- 加納千恵子・清水百合・竹中弘子・石井恵理子・阿久津智（2011 [1993]）『Intermediate Kanji Book Vol.1 改訂第3版』凡人社。
- 北原保雄 編（2010 [2002]）『明鏡国語辞典 第二版』大修館書店。
- 佐久間鼎（1941）『日本語の特質』育英書院。〔復刻版：くろしお出版, 1995年。〕
- 新屋映子（2009）「形容詞述語と名詞述語」『国文学解釈と鑑賞』74-7, pp. 30-40, 至文堂。
- 鈴木重幸（1972）『日本語文法・形態論』むぎ書房。
- （1980）「品詞をめぐって」『教育国語』62, 教科研国語部会。〔再録：鈴木重幸（1996）『形態論・序説』, pp. 57-84, むぎ書房。〕
- 高橋太郎（1996）「品詞の構成」『国文学解釈と鑑賞』61-1, pp. 14-19, 至文堂。
- 中山健一（2015）「類義漢語の品詞性と意味—「貧乏」と「貧困」について—」『日本語文法学会第16回大会発表予稿集』pp. 240-247。
- 日本国語大辞典第二版編集委員会・小学館国語辞典編集部 編（2000-2002 [1972-1976]）『日本国語大辞典 第二版』小学館。
- 早津恵美子・佐藤佑・茶谷恭代・中山健一・福原聡美（2012）『大学生のための語彙論入門』東京外国語大学大学院総合国際学研究院。
- 松村明・三省堂編修所 編（2006 [1988]）『大辞林 第三版』三省堂。
- 村木新次郎（1996）「意味と品詞分類」『国文学解釈と鑑賞』61-1, pp. 20-30, 至文堂。
- （1998）「名詞と形容詞の境界」『言語』27-3, pp. 44-49, 大修館書店。
- （2004）「漢語の品詞性を再考する」『同志社女子大学 日本語日本文学』16, pp. 1-35。
- （2009）「日本語の形容詞」『国文学解釈と鑑賞』74-7, pp. 6-19, 至文堂。
- 山口明穂（2007）「品詞」飛田良文 編『日本語学研究事典』p. 195, 明治書院。

コーパス

国立国語研究所「現代日本語書き言葉均衡コーパス (BCCWJ)」オンライン版「中納言」
<https://chunagon.ninjal.ac.jp/>

On the difference between *binboo* and *hinkon* in syntactic category
and meaning

Kenichi Nakayama

In Japanese there are many loan words from Chinese (*kango*). The *kango* words *binboo* and *hinkon* ('poverty' or 'poor') are synonyms and used as nouns or adjectives. In this paper we discuss the difference between these two words in syntactic category and meaning based on the analysis of "the Balanced Corpus of Contemporary Written Japanese" (BCCWJ). Firstly, regarding the syntactic category, *binboo* is used as an adjective more frequently. On the other hand, *hinkon* is used as a noun more frequently. Secondly, regarding the meaning, *binboo* indicates 'poverty' as person's individual status or condition. On the other hand, *hinkon* indicates 'poverty' as the circumstance of a certain social group such as a county or an area. Thirdly, *hinkon* indicates another meaning 'shortage' or 'lack' only when used as an adjective, not as a noun.